
 書 評 ・ 紹 介

Fumie Kumagai

 Family Issues on Marriage, Divorce, and Older Adults in Japan:
 with Special Attention to Regional Variations

Springer, 2015, 184pp.

日本の国土は狭いにも関わらず、地域間の文化的な違いは大きい。今日の家族研究からは、日本では、同じ都道府県の中でも地域によって家族がもつ特徴は異なっていることが示されている。このような地域的な多様性はなぜ存在しているのだろうか。筆者は、文化やライフスタイルの地域的な多様性の背景には、近年になってから成立した行政区による影響ではなく、律令制以来の伝統的な封建支配システムによる影響があると考えている。(筆者はこれを「二重構造モデル」と呼んでいる。)本書ではこのような考え方に基づいて日本の家族の地域的な多様性について議論している。

本書で具体的に取り上げられているのは、日本の人口転換(第2章)、コートシップと結婚の歴史(第3章)、国際結婚(第4章)、離婚の変化(第5章)、熟年離婚(第6章)、高齢者の独居(第7章)という6つトピックである。各トピックに対し、国勢調査や人口動態統計、人口推計などの官庁統計のデータの検討とともに歴史的・文化的背景を示し、考察を示すアプローチがとられている。その際、データが一般的な図表の形で提示されているだけでなく、地理情報分析支援システム MANDARA による統計地図が使用されている点が本書の特徴の一つである。

各章を簡単に要約する。第1章では本書の問題意識と研究手法、データについて示している。第2章では日本の出生力低下と高齢化が世帯構造の変化とともに起きていることを示し、山形と鹿児島の特徴について触れている。第3章では結婚の歴史を示し、明治時代以来の結婚行動の変化を論じている。また、近年の「婚活」についても触れている。第3章では山形県の農村地域の研究から、この地域で国際結婚が望まれる背景に多世代同居の文化があると述べている。第5章では離婚率の上昇と地域による水準の違いについて論じ、離婚率の高い地域と低い地域の背景を分析している。第6章では、近年注目されるようになった熟年離婚の発生率は、いまだにそれほど高い水準とはいえないということ述べている。第7章では高齢者の居住形態について山形、東京港区、鹿児島の実地分析を行い、一人暮らしの高齢者の増加について論じている。第8章では全体の要約と議論を行っている。

なお、第8章で指摘されているが、本書における分析には2つの制約がある。一点目は歴史的・文化的要因を量的分析で使用していない点である。これは歴史的・文化的要因の定量的な測定が困難であるためだと筆者は述べている。二点目は、官庁統計の地域別集計の結果が十分に得られなかったという点である。いずれも、歴史的背景と家族の地域的な多様性の関係を論じるにあたっては大きな制約であると思われるし、評者が本書を読み進める中でもどかしさを感じた理由でもある。とはいえ、これらの制約は分析手法の発展や官庁統計の利用拡大、社会調査データ自体の増加によって徐々に解消されていくだろう。家族研究を行う上で歴史的・文化的背景が重要であることは否定できない。今後、本書の視点を踏まえた研究がさらに行われることを期待したい。(中村真理子)